



音楽は国境を越えて

錦田 愛子 (にしきだ あいこ)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
非常勤研究員

しかし名前のとおり金色に統一されたホールは、天井が高く荘重で、柱の優美な女神像には音響効果もあるという。いかにもクラシック音楽の殿堂らしい雰囲気をも十分に醸し出していた。

インドからウイーンへ、 そしてイスラエルへ

帰国後しばらくして、めでたく博士の学位をいただけることになった。自分へのご褒美として選んだのは、今年のニューイヤール・コンサートの指揮者スーピン・メータが率いるコンサート。曲目はドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」と、リヒャルト・シュトラウスの「ツアラトウストラはかく語りき」。大学院を修了し、関東で新生活を迎えようとする自分にとって、「新世界」とはなんとなく語呂もいい。

演奏は申し分なく、すばらしかった。会場のサントリー・ホールは満席だった。終了後、コンサートに誘っていただいた先輩と一緒に食事に出かけたが、ここはインド出身のメータに敬意を表してインド料理にしよう、ということになった。知らなかったのだがメータはインドのムンバイ(ボンベイ)の生まれらしい。父親のメーリ・メータもまた指揮者で、ボンベイ交響楽団の創立者である。メータ自身は十代後半から留学し、ウイーンで

音楽を学んだ。しかし同時に、メータはイスラエルとも関係が深いことで知られる。実際、メータは今回の奏者であるイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団で、一九六九年から音楽顧問を務めている。イスラエル国内のヘブライ大学、テルアビブ大学などから名誉博士号を授与されているそうだし、一年のうち三カ月をイスラエルで過ごすとの話も聞かれる。コンサートのパンフレットでは、彼とイスラエル・フィルの密接な関係が強調されていた。

後で調べると、彼はゾロアスター教の家系だということがわかった。ゾロアスター教といえば、イランで紀元前七世紀に始まった宗教で、信徒の一部は八世紀ごろインドへ移動したという。ムンバイを中心に、現在も「パールシー」とよばれる集団が一〇万人規模で存在するとされる。そういえばメータもムンバイ出身だ。そう考えると、この日の演目である「ツアラトウストラはかく語りき」もにわかに意味深いもののように思われてきた。「ツアラトウストラ」とはゾロアスターのこと。もちろんこの曲は、ドイツの哲学者ニーチェの書いた本を原作としている。ニーチェの作品とゾロアスター教の教義とは直接関係がないとはいえ、メータにとってこの曲名は何か独特な連想を促すニュアンスをもっていたり

寄ってきた。

残念ながら演奏を聴くことはできなかったが、会場内部の見学ツアーに参加してきた。ニューイヤール・コンサートが催されるゴールデン・ホール(大ホール)は、収容人数は一〇〇〇人と意外に少なく、こぢんまりとした造りだった。第二次世界大戦の破壊を免れたという建物は、一九世紀の建築当初の様式をそのまま生かしており、木目がむき出しのステージや観客席は、少し古びた印象を与える。

ウイーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤール・コンサートといえば、西洋クラシック音楽を愛する者としては一生に一度は行ってみたい、憧れの舞台だ。わたしはそこまでクラシック好き、というわけではないが、父の影響で子どものころからなんとなく演奏会に足を運ぶことが多かった。この春にはたまたまウイーンに行く機会に恵まれて、コンサートの会場であるウイーン楽友協会ホール(ムズィーク・フェライン)に立ち

で、レッスンの合間に挟まれる英語とアラビア語交じりの説明に必死に耳を傾けている。その音色はもちろんまだたどたどしいものではあるが、わたしは彼の目の輝きに強く胸を打たれた。長いあいだフィールド調査をしてきたが、これほどまでに真摯で純粋な輝きをもった瞳を見たのははじめてだった。

同じ年ごろの少年が、イスラエル軍の侵襲に際しては抵抗の石を投じることもある。それを「テロリスト」の予備軍とみなしたり、子どもを盾にしている」と

批判する声も聞かれる。だが彼らに石を握らせるのは何なのか。楽器を握らせてやさしく教えてあげれば、こんなにも素直に喜びを顔にする子どもたちが、あえて石を握るのは、むしろ彼らをとりに巻く日常に問題があるからではないだろうか。文化交流の面では、ほかに国境を越えた協力の例が見られる。日本もパレスチナで文化施設の建設を支援し、地元の人に喜ばれている。しかし政治の面ではいまだ厳しい分断が続く。イスラエルとパレスチナとのあいだには高さ八メー

トルのコンクリートブロックがそびえ立ち、物理的な障壁として両者の生活圏を遮断している。両政府のあいだの外交交渉は断絶して久しい。こうした分断が長く限り、紛争の解決は遠く、日常生活をめぐる状態が改善する見通しも暗いだろう。日常化するトランスナショナルな移動や交流の一方で、ローカルな交流や交渉すら困難な閉塞状態。これらの並存するいびつな様相が、グローバル化社会の現状といえるのかもしれない。

はしないのだろうか。自己のルーツを匂わせる、第三者による作品を、演奏に向けてふたたび自分が解釈し表現していく。芸術作品という媒介項をとおしたこの不思議なやりとりを、彼はどう感じていたのだろうか。

越えられる国境、 越えられない壁

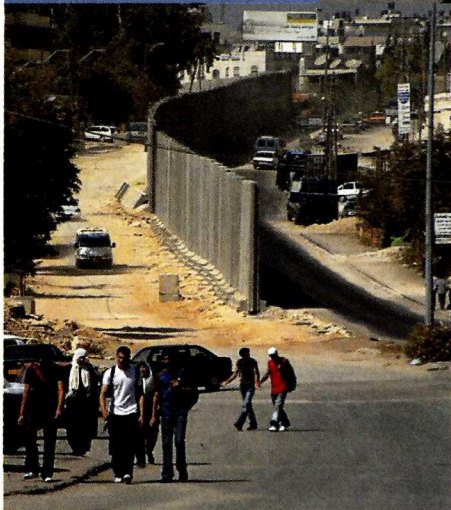
音楽をめぐる越境という点については、かつてわたしは感動的な場面に遭遇したことがある。それはわたしの調査地であるパレスチナ難民キャンプでの出来事だった。ヨーロッパから来たプロの楽団のメンバーが、キャンプの子どもにボランティアで楽器演奏の指導をしていた。音響設備も何もない簡素な部屋で、プラスチックの椅子を積み上げて譜面台の代わりにして、バイオリンのレッスンがおこなわれていた。少し前に転んで手を怪我したという少年は、はじめてのレッスンの夢中だった。表情は真剣そのもの



パレスチナ難民キャンプではヨーロッパから来た楽団のメンバーが、キャンプの子どもにボランティアで音楽指導をしていた



日本の寄付でパレスチナ自治区にできたコンサート・ホール。前の通りは「東京通り」とよばれている



治安目的としてイスラエルがパレスチナ自治区とのあいだに建設を進める分離壁。人びとの生活を分断している